ルーン文字の起源をめぐって
（その２）

河崎　靖

1. ルーン文字の由来

ルーン文字による言語資料が断片的であれ残っているおかげで、ゲルマン語の古い姿から中世の北欧語までを、データの裏付けに基づいた実在性のあるものとして捉えることができる。古フサルクの銘文はスカンディナヴィアとりわけデンマーク周辺に集まっている。それにしても、この北ヨーロッパ圏で他の地域と比べかなり早い時期にアルファベットによる文字表記が独自の文字体系の発展形として定着していることになる。

ルーン文字が直接どの文字体系をモデルにしたのかを問う問題提起を行っている先行研究を類別化してまとめると、①ラテン文字説、②ギリシア文字説、③北イタリア文字説となる。従来、常にこれら３つの学説が取り沙汰されてきたが、いずれにしても、長い先行研究史の中でこれまで統一的で決定的な見解が打ち出されることがなかった。本稿では、かつて部分的には提出されることのあった ④フェニキア文字説をとりあげ、合計４つの学説の強み・弱みを総合的に検討することを目指す。

ルーン文字がどのようにして誕生したのか、その探究の歴史は長いものの、学術的な意味では未だに最終的な結論には至っていない。神秘のベールに包まれたままである。先行研究の歴史を振り返ると、どうやらラテン文字であれギリシア文字であれ、他文化の文字体系がモデルになったようである。そもそも

基本的に口伝の文化であったゲルマン人が何の目的のために文字を考案・使用したのか、文化史的に見て文字を生み出す必要性とは何か考察しておかねばならない。

当初、すなわち最古級の銘文は、沼や湖への奉納品あるいは副葬品など、非日常的なものに限られていた。それが時代を経るにしたがい、日常的・実用的な文字使用例が増えていったと考えられている。例えば、ゲルマン人のローマ帝国との接触が増えるにつれ、ローマ人がローマ帝国から離れた場所でもゲルマン人と交易も頻繁になり、ローマからの輸入品が増加した時代ではあった。ローマもしくはギリシアと密接にコンタクトをもったゲルマンの商人・傭兵たちは社会的にはいわばエリート層で、おそらくはバイリンガルの状態で両方の言語に長け、例えばラテン語を使う時にはラテン文字で書き、ゲルマン語を使う時はルーン文字を用いていたという状況にあった[1]。ただ利便性だけを言うなら、ラテン文字を用いればよかったのかもしれない。彼らはラテン文字を十分に習得し、その知識をもっていたであろうからである。こういう文化状況の中で、それでも自民族のために新しい文字体系を創ろうとする傾向は自然なものであると言える[2]。文字の使用は知的な営みであるが、ある種の文化的普遍性（例：商業的記録などが必要な交易の拡大期）のある時代、自らの文化的アイデンティティーの確立に向けて[3]、他文化を吸収し、模倣段階を経ながら自らの文字体系をもちたいと思う心情はよく理解できる[4]。

さて、ではルーン文字は文字体系として文化誌的にはどれほど成功したものであったのであろうか。この評価については、次の引用（Odenstedt:1990）にあるように、実際 ‘with very limited success’ といったところであろう[5]。

「ゲルマン人の精神文化は伝統的に口伝であり、ローマ人が実践していた書記の技術というのはゲルマン人にとって羨望の的であって、真似をしてでも自らの文化に採

り入れたいものであった。ただ、それほど成功したとは言えない（with very limited success）」（Odenstedt 1990:173）

歴史的に見て、ルーン文字がラテン文字より優位にたつことはなかったし、いつの時代にもルーン文字がラテン文字に取って代わることはなかった。これが「限定的な成功」（with very limited success）と指摘されている所以である。現に、中世以降、西ヨーロッパ各国で自らの言語をラテン文字で書き記していることもその傍証の一つと捉えてもよいだろう。しかしながら、ルーン文字を巡る歴史を辿ってみることによって、ゲルマン人の文字に対する態度が浮かび上がり、文化誌としてゲルマン語圏における文字体系の位置付けを明らかにすることができよう。本稿では、ヨーロッパ全体を見渡し、ギリシア語圏の拡大、そしてローマ帝国の勃興に伴うラテン語の普及の中にあって、いわばヨーロッパの辺境に位置するゲルマン語圏[6]における文字文化（ルーン文字・ゴート文字）の発達の様子を描く。ヨーロッパ全土を版図に、これらの文字体系相互の関連を見出し、ルーン文字の発生・由来を起源に遡り解明していくのが本稿の主たる目標である。

２. ルーン文字の諸問題

イギリスの旅行作家ジョン・マン（2000）が言うには、さまざまな文字の種類の中でもアルファベットは「他に例がなく、単純で、適応力に優れている」、つまり「完成された単純さではない。アルファベットの強みは、不完全だからこそ実用的だという点にある」、ゆえに「完璧ではないからこそ、逆にちょっと手を加えてやれば、どんな言語にも適応できる」のである。その「ファジーさ（あいまいさ）が成功の鍵」となっている[7]。そして「これまで多くの人び

とが使用してきたアルファベットの体系は、以前に生まれた体系を洗練させたか、あるいはすでに確立したものをそのまま受け継いだか、また、**どこかから伝え聞いたものをベースにして自分たち独自のものを作り上げる**かしたものだった」（太字筆者）[8]。ここでマンが言うアルファベットとは、ローマン・アルファベットのことだが、文字の伝播や普及について非常に示唆に富む見方である。では、本稿のテーマであるルーン文字の場合はどうであろうか。

21 世紀の現在、この文字を実用文として見ることはない。古代から中世にかけてヨーロッパの一部で使われた文字で、今は用いられなくなった「滅びた文字」という印象であろう。ルーン文字は主に呪術や祭祀のために用いられた文字とみなされることが多いが、実際には日常的な用途でも使われた形跡があり、ルーン文字で記された書簡・荷札などが少なからず発見されている[9]。いかにも呪術的な面ばかり強調される（実際そうした用法が他の文字体系に比べて少なくなかったというのも確かであるが）ルーン文字も、実際の生活場面で日用的な用いられ方をすることも通常であったのである。呪術に用いられる神秘的な文字というイメージができあがってくるのは、ラテン文字との相対的な関係にある。つまり、ラテン文字が普及し、ルーン文字が古めかしく異教的な印象で感じられるようになった後代のことである[10]。

北欧にラテン文字が登場するのは、本来はルーン文字の領域であった貨幣の刻銘においてであった。実際のテキスト（法律・単語集）として初めてラテン文字が使用し始められたのは今日の版図で言えばノルウェーで、それでも 11 世紀後半のことで、英・独に比べるとかなり遅い。スウェーデン・デンマークでは 13 世紀以前に、ラテン語で書かれた自国語の写本はまだ一つも発見されていない。

今日、発見されている史料で確認されていることは、中世を通し、ラテン文字は羊皮紙に、ルーン文字は石碑に書かれることになったということである。

最終的に、ルーン文字の「最後の姿」が見られるのは、デンマークで 1311 年頃、スウェーデンで 15 世紀まで、アイスランドで 1681 年である [11]。

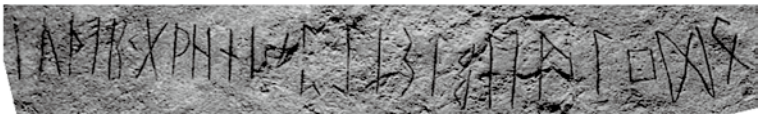
ローマ側との関係で言うと、歴史家タキトゥス Tacitus はルーン文字らしきものについて『ゲルマーニア』で言及している。

> 第 10 章
> 果樹から切り採られた若枝を小片に切り、ある種の印をつけて、これを無作為に、偶然にまかせて、白い布の上にバラバラと撒き散らす。ついで、もしこれが公の占いである場合はその邦のひとりの司祭が、私に行なわれるときは家長自身が、神に祈り、天を仰いで、一つまた一つと取り上げること三たびにして、取り上げられたものを、あらかじめそこにつけられた印に従って解釈するのである。『ゲルマーニア』（泉井久之助訳）岩波文庫（S.62）
> （virgam frugiferae arbori decisam in surculos amputant, eosque notis quibusdam discretos super candidam vestem temere ac fortuito spargunt; mox, si publice consuletur, sacerdos civitatis, sin privatim, ipse pater familiae, precatus deos caelumque suspiciens, ter singulos tollit, sublatos secundum impressam ante notam interpretatur.）

ここに出てくる nota(e)「印」はルーン文字と考えられよう。ルーン文字が最も完成した形と体系とを取って現われて来るのは紀元２世紀末期のことであるが、文字そのものの実際の使用はさらに古いことはこのタキトゥスの記述からも窺える。ここでいうルーン文字（『ゲルマーニア』は紀元 98 年の作）はまだ完成した文字体系ではなかったであろう。それらはいまだ文字というよりは、むしろ符牒であったと思われる。表音的アルファベットとしてのルーン文字は、この上にラテン文字の影響を受けて発達した [12]。同じ趣旨のことがルーン学者マイアー Meyer (1896) にも見られる。マイアーはタキトゥスの notae への言及に基づきゲルマン人の間に祖フサルク（Urrunenalphabet）なるものを想定する。

祖フサルクは極めて古いルーン文字と解されるが、より正確には頭音法により表意記号 Ideogramm より成立し、２～３世紀のラテン文字のアンシャル体（Uncialschrift）から影響を受け修正が加わったものであるという理解がなされているものである [13]。

さて、ルーン文字の体系は初期の古形では 24 個（新しい時代である、初期のノルド語およびアングロ･サクソン語の変異体では 16 または 26 ないし 33 個）の表音文字から成り立っており、いわゆるラテン文字の ABC をまねて、最初の６文字をとって「フサルク」f-u-þ-a-r-k と呼ばれる。ルーン文字は何よりもまず石・木・金属 [14]・骨の上に彫ることを目的とし、それに適った特徴（例えば、直線的である等）をもっている。本質的には銘文（Epigraph）の文字であり、一つ一つのテキストは概して短い。また、銘文の数は少なく、ぜんぶ集めても 230 に足りない [15]。24 個のルーン文字で石碑や武器や護符に記された最古の記録が書かれた時代としてはゲルマン民族内部ですでに分岐していた時期に入ってからのものであることは確かである [16]。



古フサルク期の銘文について用法を整理してみると、だいたい (1) 呪術的･(2) 世俗的 の２用法に大別できる（現存する銘文を量的に見ると（2）の方が（1）より多い)。主な特色として、(1）の用法はもちろん、(2）の用法に関しても、私的な使用であるという点が挙げられる。歴史・法律・文学などを公的に後世に伝えていくという機能はない。また、ルーン文字を彫れる者はごく限られた

階層であり、したがって閉鎖的であり、ルーン文字を彫る者（Runenmeister）は大衆から一段離れた存在であった[17]。すなわち、ルーン文字の知識はわずかな者たちだけのものであり、その書記技術は一握りの者たちが保持していた。

ルーン銘文（runic inscription）はゲルマン語最古の（断片的）資料であるが、一般にルーン碑文と言われることが多いのは、新ルーン文字（ヴァイキング時代：9 世紀～）が規模の大きい石碑に書かれたためである。初期には、製作者の名前を記した１語から２語のものが多く、断片的で数語の短文にとどまることが多かった。また、左から右に書くことが多いが、その逆もあり、また牛耕式（boustrophedon writing, エトルリア人によるラテン文字資料にも見られる）もある。大文字と小文字の区別はなく、語の切れ目は明示されなかった。

ところで、ルーン文字の起源に関する重要な課題として、ルーン文字がいつ成立したかという時期の問題がある。フサルク銘文にスカンジナビア諸語の特徴が明確に見られようになるのはおよそ西暦 500 年以降である[18]。モデルとして、ゲルマン祖語（Proto-Germanic）：紀元前 2000 年頃、北西ゲルマン語（Northwest Germanic）：紀元後 150 年頃、北ゲルマン語（North Germanic）：紀元後 450-500 年頃という図式をたてると[19]、北西ゲ（Nw.G）の時期に、/ai/ > /ǣ/ という単母音化、および、/ǣ/ > /ē/ という音変化、すなわち、/ai/ > /ǣ/ > /ē/ という音変化が起こっているので、

PG */tawidai/ > NwG /tawidē/「作った」（３人称単数過去）

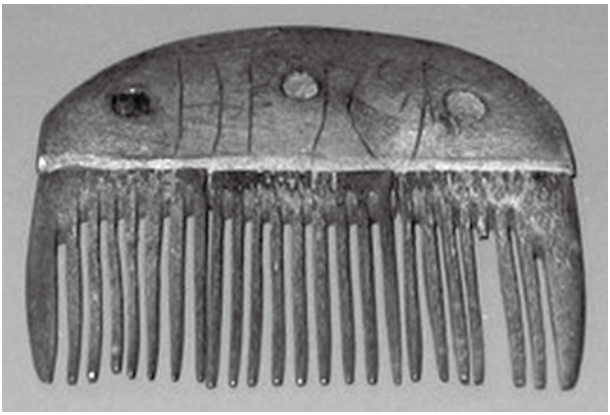
というように /ê/ が予測されるが、

‘tawide’「作った」（Garbølle 木製箱，400 年）の他に、

実際には、‘talgidai’「彫った」（Nøvling フィブラ，200 年），‘maridai’「飾った」（Vimose フィブラ, 250~300 年），‘aiwuidai’「作った」（Darum ブラクテアート，450~550 年）のように、-ai という表記が見られる。この表記はより古い書記規範に従ったためであると考えられる[20]。また、この音変化と同じ原理で、

PG */hanhai/ > NwG /hanhē/「軍馬」（a 語幹単数与格）
に関しても、同様に、
‘winai’「友」（Årstad 石碑 , 300 年）, ‘faþai’「夫・主」（Charnay フィブラ, 550~600 年）のように、-ai という表記が見受けられる。この現象も、先の場合と同じく、より古い書記規範に従ったためと考えられよう。

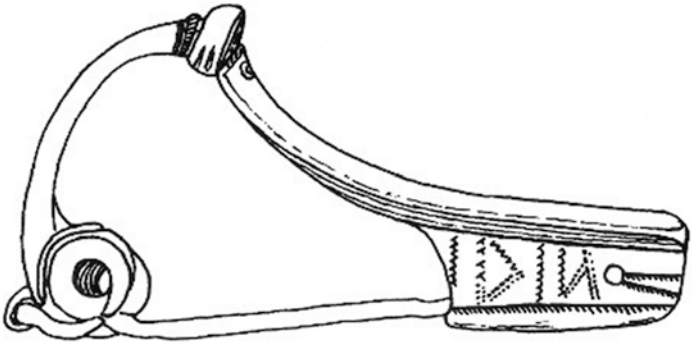
歴史学的・考古学的に言うと、これまでに知られている最古のルーン銘文は紀元後２世紀後半の「Vimose の櫛」で、harja という人名が刻まれている。



この名（harja）が彫り手を指しているのか所有者のことなのかは不明である。Vimose はオーデンセから北西へいったところで、ここから 1848 年から 1869 年の間に 3,600 点ばかりの出土品（武器・道具・装身具・遊具など）があった。ユトランドからフェーネン・シェラン島にかけては沼地が多く、こうした沼地に戦勝の供物として、曲げたり折ったりした武具その他を投じたのであろう [21]。

ただ、今日もなお決着の付いていない、Meldorf（ドイツのシュレスヴィヒ・

ホルシュタイン州の古都）で 1979 年に発掘されたフィーブラ Fibula（衣服などの飾り留め金用のブローチ）に記された文字に絡む議論（ルーン文字なのかラテン文字なのか）から得られる情報は少なくない[22]。このフィーブラに表記された文字をルーン文字だと想定すれば[23]、ルーン文字の誕生をいくらか早い時期に（およそ紀元後 50 ～ 100 年くらいに）設定し直さなくてならないことになる[24]。



Meldorf のブローチ

銘文（Düwel 1981:160）

ただし、同時期にこの近辺からルーン文字の銘文が見つかっていないこともあり、必ずしも先行研究がこの意見（Meldorf 銘文をルーン文字と確定する）に集約されているわけではない[25]。現状では、ラテン文字（大文字）で表記され

たゲルマン語のテキストであるという見解が優勢である（Odenstedt 1990:148 など）。つまり、ゲルマン語を表記するのにラテン文字を使っているということであり、これは同時に、ローマ文化とゲルマン文化の接点からルーン文字が成立したという立場を裏付ける史料ともなり得る。こうして、Meldorf の留め金用ブローチは、敢えてルーン文字とみなし hiwi（女性単数与格）「私の妻に」と読むよりは[26]、むしろ（左から右へと書かれた）ラテン文字（大文字）と解釈するのが妥当であろう（IDIN）[27]。すなわち、iðin（-ôn という語尾ではないが）「Ida のために」と（もしくは「Idda のために（男性単数与格）」という読みである[28]。少なくとも、ゲルマン人がルーン文字を生み出そうとしている時点で、ラテン文字はゲルマン人に十分よく知られた文字体系であった[29]。

ルーン文字体系の起源に関しては、古来、多くの学者が論議して今日に至っているものの、今なお未解決であると言わざるを得ない。

> “The creation of the runic system almost certainly owes something to interaction between Roman and Germanic culture, though the mechanisms at work are subject to much debate. Debate over runic system’s origins has produced an enormous body of scholarship.” (Anderson 2005:1)

文字の起源論には、由来そのものの他に、誰（どの民族）が借用・作成したのか、あるいは、何時どのようにといった論点も含まれることになるが、ルーン文字について、これらのすべてを破綻なく説明できるテーゼはまだ提出されていない。ルーン文字の起源論は、なお決め手を欠く推察のみに基づき未だ仮説の域を出ていない。今のところ、はっきりしている諸点は、１）フサルクを初めて創造した者はかなり自主的に文字を作ったこと、２）ゲルマン語に応じた文字の工夫をこらしていること、３）ギリシア・ラテン・北伊のいずれとも完全に無縁ではないこと、等である[30]。

今日、古フサルクの銘文が極めて多く出土しているのはデンマークで、年代的には遅くとも紀元後200年頃にさかのぼり、成立は紀元後１世紀前半とされている。先行研究史を通じて、ルーン文字がアルファベットの系統の中でどこに関連付けられるかという点には不確定の要素が多分にある。古くは、イタリア北部で非印欧語族のエトルリア人が用いていた古いラテン文字を、現地で接触したゲルマン人が独自の創造を交えて借用したとする意見が多かったが、近年では、ローマ帝国との接触が密接だったデンマークのユトラント半島南部を発祥の地とする説が有力である[31]。ルーン文字の言語（紀元２世紀頃）は確かに原始的なゲルマン語で、多くの点でゴート語より古風である[32]。この言語形態・文字体系からルーン文字の起源について推察したウォルシュ M. O'C.（1990）も「ルーン文字の正確な起源は完全には明らかではないが、それらの文字は黒海沿岸のゴート族あるいはたぶんボヘミアを占領したゲルマンの部族マルコマンニ族の間で発達したようである。元になったのはギリシア文字かラテン文字で、可能性の強いのは北イタリアの文字らしい」という妥協案的な結論付けしかできていない[33]。

ギリシア・ローマ
両アルファベットの比較
古典ギリシア文字
エトルリア
ローマ古典期
ローマ字現代
Α ἄλφα Α Α ā Α
Β βῆτα Β Β bē Β
Γ γάμμα C G kē gē C
Δ δέλτα D D dē D
Ε ἐ ψιλόν E E ē E
F Fαυ F F ef F
G
Ζ ζῆτα Z Z zēta
Η ἦτα H H hā H
Θ θῆτα
Ι ἰῶτα I I ī I J
Κ κάππα K K kā K
Λ λαμβδα L L el L
Μ μῦ M M em M
Ν νῦ N N en N
Ξ ξῖ X X ix
Ο ὀ uīκρόν O O ō O
Π πῖ P P pē P
Ϙ κόππα Q Q kū Q
Ρ ῥῶ R R er R
Σ σῖγμα S S es S
Τ ταῦ T T tē T
Υ ὑ ψιλόν Y U ū U
Φ φῖ Φ Υ ȳ psīlon V
Χ χῖ X W
Ψ ψῖ Ψ X
Ω Ω Y
Z

長い先行研究の中で常に問題となってきたのは、これまで決して統一的で決定的な見解が打ち出され得なかった点である。先行研究の歴史を類別化してまとめれば、① ラテン文字説、②ギリシア文字説、③ 北イタリア文字説 となる。従来、これら３つの学説がいつも取り沙汰されることになっていた。いずれも、ルーン文字が直接どの文字体系をモデルにしたのかを問う問題提起である。以下、それぞれの説の概観を見ていこう。

２－１．ラテン文字説

歴史学・考古学的に照らしてみても、ルーン文字の発生の背景にあってモデルとしてはたらいたであろう候補として挙げられる可能性の最も高いのはラテン文字である [34]。

> ‘It can hardly be doubted that it was the Roman alphabet that served as a model when the *futhark* was created some time at the beginning of our era.’ [35] (Odenstedt 1990:Abstract)[36]

例えば、ルーン文字はラテン文字（大文字）[37] から発達したという立場にたつデンマークの Wimmer, L.F.G.（1839-1920）は、ルーン文字とラテン文字の外形的類似という観点 [38] 以外に、言語文化的・歴史的事情を考慮した点で合理的な説明を行っていると言える [39]。

Rune	*Roman capitals*	*Runes*	*Roman capitals*
ᚠ	F	ᛊ	Z
ᚢ	V	ᛈ	new letter
ᚦ	D	ᛉ	Y
ᚨ	A	ᛋ	S
ᚱ	R	ᛏ	T
ᚲ	C	ᛒ	B
ᚷ	X	ᛖ	E
ᚹ	P	ᛗ	M
ᚺ	H	ᛚ	L
ᚾ	N	ᛜ	Q
ᛁ	I	ᛞ	new letter
ᛃ	G	ᛟ	O

ルーン文字の誕生・成立は、紀元後２・３世紀にローマ人と密接な関係にあった南ドイツ・ライン川沿岸あたりのゲルマン人によるもので、そこから近隣の諸民族へ、さらに北欧へと広まり発達していったのであろうという説明である[40]。つまり、ローマ帝国との国境付近には、ローマ帝国と接触をもつローマ化したゲルマン部族がいた[41]。この地域からライン川やエルベ川を伝って北海ルートをとり、文化や物品と共にルーン文字の知識が伝わったのではないかと考えられる。いずれにしても、ローマ帝国と接触していたのは、エリート層、すなわちローマ帝国に雇われた兵隊・職人・商人であったであろう[42]。このように、ライン川流域でゲルマン人が紀元後数百年の間にローマ人と交易を重ねていたからという観点[43]から、Düwel（32001）も次のように述べ、この考え方（ラテン文字がルーン文字に影響を与えたという説）を支持している[44]：

> „Die Runenschrift wurde auf der Grundlage eines mediterranen Alphabets, am ehesten des lateinischen, in der Zeit um Christi Geburt bis ins 1. Jahrhundert n.Chr. hinein im westlichen Ostseeraum.“。

	Wimmer/ Pedersen	Askeberg	Moltke
ᚠ	F	F	F
ᚡ	V	V	V
ᚦ	D	D	D
ᚨ	A	A	A
ᚱ	R	R	R
ᚲ	C	C	C
ᚷ	X	X	?X
ᚹ	Q	P	?P
ᚺ	H	H	H
ᚾ	N	N	new letter
ᛁ	I	I	I
ᛄ	G	G	new letter
ᛇ	Y	Z	new letter
ᛈ	P	new letter	new letter
ᛉ	Z	Y	new letter
ᛊ, ᛋ	S	S	S
ᛏ	T	T	T
ᛒ	B	B	B
ᛖ, ᛗ	E	E	M
ᛗ	M	M	M
ᛚ	L	L	L
ᛜ	new letter	new letter	new letter
ᛞ	new letter	new letter	new letter
ᛟ	O	O	O

さらにローマのラテン文字のその元を辿れば、古代イタリアのエトルリア文字に遡ることになる。紀元前７世紀の頃、栄えていたエトルリア（紀元前３世紀にローマに制圧される）は、アルプスを越えて来襲したキンブリー族などゲルマン系の民族との接触もあったであろう。これら北方のゲルマン人にエトルリア人から直接、文字が伝わった可能性もあり得ることである[45]。もっとも、ラテン文字は一般的にエトルリア文字を仲介として、間接的にギリシア文字を継承したものである[46]。およそ現在、私たちが見慣れているのラテン文字が確立するのはおよそ紀元前３世紀頃と想定されている。文字の形状について言えば、ルーン文字のᚠ，ᚱ，ᚺ，ᛊ，ᛚはラテン文字（大文字）のＦ，Ｒ，Ｈ，Ｓ，Ｃに由来すると考えられている[47]。また、E. Moltke（1951）の言うように、文字伝播の経路の問題にも無理がない。すなわち、古い銘文の数多くがデンマークに見出されるのは、当時１～２世紀のデンマークは貴族制で文化的に栄えており、ローマと頻繁に交易を行う下地が整っていたのだとみることができる。

古フサルク銘文の発見場所（エリオット 2009:42）

古代ラテン文字は紀元前後１世紀の間に徐々に廃れていき、ラテン文字が標準化する[48]。つまり、ライン川近辺のゲルマン人（例：ウビィー人）が文字の知識を北方へもたらし､北海沿岸で最古級の銘文が多く発見されることになった。発祥の地を、最古級の銘文が多く出土している北海沿岸・スカンディナヴィアとみなすのは自然であるが、ローマ文化とより多く接触があったライン川の国境付近も候補になってくる[49]。すなわち、国境付近のローマ化したゲルマン人が、ライン川やエルベ川を伝って北海ルートをとり、文字の知識が伝達したのである（紀元後１世紀頃)。それでも、北海地域と、影響の元となったと考えられるローマ帝国の国境周辺地帯とは距離がかけ離れている。

２－２．ギリシア文字説

上で述べた学説（ラテン文字説）と並んで、従来、注目されて来たテーゼとしてギリシア文字説がある[50]。ノルウェーの Bugge, S. によって唱えられ始めた、このギリシア文字説では、ルーン文字の起源にはゴート人（ドナウ川下流）が関わっているとされ、ギリシア語・ラテン語の両方を十分にこなすゴート人の傭兵によって紀元後３世紀頃、黒海あたりで生み出されたのだと主張する[51]。そしてその後、今のスカンジナビア方面に向かって広まっていったのだと想定されている。文化背景として、紀元後２世紀頃、黒海の北方地方と北欧との間に文化的・商業的関係のあったことも考古学的に裏付けられている（スウェーデンの Otto von Friesen（1870-1942）など）[52]。200 年頃、この文化圏は、バルト海南岸に達し、東は東プロイセンから西は Schleswig にまで及んでいたという。

Phoenician (the Mesa alphabet and its variants c. 850 B.C.)		Greek (the Samos alphabet c. 660 B.C.)		Etruscan (Marsiliana c.800 B.C. and later variants)		Latin: Old-Latin	Latin: Classical Latin
Name	Sound value	Name	Sound value	Name	Sound value		
alf	guttural	alpha	a	a	a		A
bet	b	beta	b	be	(b)		B
geml, gaml	g	gamma	g	ke, ka	k(g)		C
delt	d	delta	d	de	(d)		D
he	h	epsilon	(short) e	e	e		E
uau	w	uau	w	ve	v		F
zajin	z	zeta	z		z		Z
chet	kh	eta	(long) e		e		H
thet	th	theta	th		th		-
jod	j	iota	i	i	i		I
kaf	k	kappa	k	ka	k		K
lambd	l	lambda	l	el	l		L
mem	m	my	m	me	m		M
nun	n	ny	n	ne	n		N
semk, samekh	s (ks)	(ksi)	ks	(s)	ks	-	-
hayin	guttural	omikron	(short) o	o	(o)		O
pe	p	pi	p	pe	p		P
sade	s (ts)	-			s	-	-
qof	q	koppa	q		q		Q
rosh, resh	r	ro	r	re	r		R
shin	s (sj)	sigma	s	se	s		S
tau	t	tau	t	te	t		T
		ypsilon	y		u,y		V
		phi	f		ph	-	-
		khi (West Greek X=ks)	kh		s	-	X
		psi (West Greek	ps kh)		kh	-	-
		omega	(long) o	-		-	-
					f		G
					s		Y

文字の外形的類似という点ではギリシア文字との関連も見逃せない。v.Friesen によれば､ギリシア文字の斜字体（Kursivschrift）がモデルとなっているという。彼の説では、ゲルマン語の音を写すのに主にギリシア文字斜字体が用いられ、補足的にラテン文字が借用されたとされる[53]。v.Friesen（1906）の考えを図式的に表わすと次のようになる。

Runen		Her-kunft	Vorbild	
Form	Laut-wert		Zeichen	Laut-wert
ᚨ ᚩ	*a*	*griech.*	Α α	*a*
ᛖ ᛗ	*e*	„	Μ Κ Ν	*e*
ᛇ ᛈ	*ę*	„	Ε ρ ς ϛ	*e*
ᛟ	*o*	„	ο ω	*ō*
ᚢ	*u*	*lat.*	V U	*u*
ᚹ	*w*	*griech.*	Υ	*(y), v*
ᛃ	*j*	„	ϛ = ζ = ει	*(ei), i*
ᛁ	*i*	„	Ι	*i*
ᛞ ᛞ	*d*	„	Θ θ	*þ*
ᚷ	*g*	„	Χ	*χ (ch)*
ᚠ	*f*	*lat.*	F ϝ	*f*
ᚦ	*þ*	*griech.*	Ψ ψ Φ φ = φ	*(ph), f*
ᚺ ᚻ	*h*	*lat.*	Η η	*h*
ᛊ ᛋ	*s*	*griech.*	Σ = C. ς = σ	*s*
ᛉ	*R*	„	Υ ψ	*ps*
ᛈ ᛜ	*p*	„	Π π ϖ	*p*
ᛏ ᛚ	*t*	„	Τ Τ	*t*
ᚲ ᚳ	*k*	„	Κ Κ	*k*
ᚴ	*l*	„	λ ʌ ʌ	*l*
ᛗ	*m*	„	Μ ʍ	*m*
ᚾ	*n*	„	Ν ᴎ ᴎ ᴎ	*n*
ᛜ ᛝ	*ng*	„	Π ΠΓ · γγ	*ng*
ᚱ	*r*	*lat.*	R	*r*
ᛒ	*b*	*griech.*	R	*b*

このギリシア文字説は 19 世紀には注目を集めていた考え方であった。ルーン銘文最古の「Vimose の櫛」が２世紀のものであるとされる以上、ルーン文字がギリシア文字に由来するとみなすのは時間軸に照らして考え難いと言わざる得ない。ゴート人がギリシア人と接触をもち始めるのはようやく３世紀になってからのことであり、ゴート人が４世紀にキリスト教に改宗する以前にギリシア文化の影響を受けたことを証明するものがない。238 年以前にゴート人が黒海沿岸にいたという証拠も見出されていない。このように、たとえルーン文字

が黒海北方地方のゴート人の間で使用され始め、その使用が 200 年代に黒海沿岸から北欧へと及んだのであろうと考えたとしても [54]、最古級の銘文が発見されている場所である北海地域と黒海地方との間には大きな距離があるのもまた事実である。

２－３．北イタリア文字説

上記の２説（ラテン文字説・ギリシア文字説）以外の第３の説として、北イタリア（エトルリア）文字説がある。ノルウェーの Marstrander, J.S.(1883-1965) をはじめ、フィンランドの Hammarström, M. やドイツの Feist. S.[55] は、北イタリアで発見された古エトルリア語の記録に注目し、この文字とルーン文字との関連性を主張する趣旨の見解を発表している [56]。１世紀のはじめ、北イタリア・アルプス地方には、いくつかのアルファベットが実在しており（いずれもエトルリア文字の変種）、見た目ルーン文字によく似ている。確かに Wikipedia など一般的な情報源にもこの説が紹介されている [57]。

北イタリア文字とは、古代レティア（Rätien）のアルプス地方およびポー川平野の頭部で、紀元前５世紀から紀元後１世紀まで使用されていた文字のことである。トスカナ地方のエトルリア文字に近いので、北エトルリア文字と呼ばれることもある。いずれにしても、北イタリア文字はエトルリア文字から由来したとされている [58]。

ルーン文字の多くは確かに北イタリア文字と形状においてかなり類似している[59]。この説（北イタリア文字説）に従えば、ルーン文字は、レティア人 Räter，イリュリア人 Illyrer，ヴェネト人 Veneter 等のアルプス地方の諸民族から伝播したとされるのである。地理的に見ると、

１．レティア文字（ケルト語・エトルリア語・レティア語を写す）

１）ボーツェン (Bozen)・マルグレ (Malgrè)・ソンドリオ（Sondrio）のアルファベット

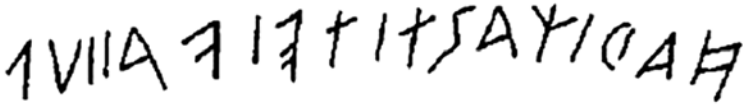
２）レポント文字（ルガノ Lugano の文字）

２．ヴェネト文字[60]

印欧語のヴェネト語を写すのに用いられた。

の通りで、これら全体で 500 弱の銘文（大部分は短い献辞）を残している（紀元前 400 年～紀元後 200 年）。確かにフサルクと同様、彫るのに適した角ばった形で鋭角的である。ゲルマン語を記すのに北イタリア文字が出現したケース（短い献辞）としてネガウの兜 Helm von Negau（ネガウ：現スロヴェニアの地名）が挙げられる（1811 年発掘）[61]。

西暦紀元の始まりの頃（もしくはそれ以前）と推定されており[62]、その語句とは（右から左へ書かれ）、



HARIGASTITEIWA

と表記されている。

「ハリガスト（Harigast）[63] が神（teiwa）に [64]」

を意味すると一般的に解釈されている。

北イタリア文字は確かに紀元前２世紀頃からラテン文字の強い影響を受けるのだが、キリスト教の時代以前にゲルマン人（ボヘミアのマルコマネン人 Markomannen）によって北の方へもたらされ、ルーン文字が誕生する下地ができあがったと考えることもできよう。北イタリア文字がラテン文字から D, R, C, B, F, T, E を借用したとして、ゲルマン語への伝播を紀元前１世紀頃と考えれば、全般的に筋の通った自然な説明となる。ゲルマン側の仲介者などの点（どの種族が仲介者・伝播者なのかに関する裏付けの記録は何もない）を除き [65]、現在も多くの研究者に発展継承されている考え方である。併せて、文字の系統を判断する条件として、視覚的に類似性が認められること以外に、文化史上の流れが確認できることが重要である [66]。北イタリアの文字に見られる諸特徴とルーン文字の書記上の特性に共通性が見出されるのである [67]。

１）書く方向が①左から右へ②右から左へ③牛耕式の３種類である。
２）いくつかの点あるいは垂直線を引く句読法を用いる。
３）「～が－を作れり」タイプの銘文が多い。
４）重子音が１文字で書かれる正書法である。
５）エトルリア語・ヴェネト語にアルファベット一連の銘文がある。

ここまで先行研究に見られる諸学説（ラテン文字説・ギリシア文字説・北イタ

リア文字説）を概観してきたが、次の Anderson（2005:1）が述べているように、これまで唱えられてきた３つの主な学説のいずれか、もしくは、それらの組み合わせでもってしても、ルーン文字体系全般を解明するような一貫性のある説得的な説明ができないと言えよう。

> It is clear that the runic characters were inspired in part by Mediterranean writing systems - Roman, Greek, North Italic, or possibly some combination of these - but there has been no firm consensus on this point. (Anderson 2005:1)

どれかいずれかの説が正しいというのではなく、どのテーゼにも不十分な点が残るということである。一般的にルーン文字の起源について論じる際、たいていの場合、ルーン文字が直接的にどの文字体系に由来しているかが問題になることが多い。しかしながら、ルーン文字の形状・名前・配列順序・書記ルールなど文字体系全体に関して検討していくならば、ギリシア文字・北イタリア文字・ラテン文字の原型であるフェニキア文字をも含めて考察の対象にする必要があることを次の機会に示したい。

註

1 谷口（1971:11）：「８世紀以前を概観して注意をひくのは石碑以外のほとんどのものが高価な品である点で、それはルーンの担い手が上層階級に限られていたことを語っている」。

2 原（2005:38）：「文盲のゲルマン人がラテン文字が音を示す記号であり、言葉を留めておく手段であると理解するのにどれ程の時間と労力が要されるだろうか。一朝一夕には取得できないはずである。それほどまで努力して得たものをなぜわざわざ変更して独特のルーン文字として発案、発展させなければならないのか理解に苦しむのである。ラテン文字を利用すればいいのである。ない音

素だけを考案すればいいのである」。

3 原（2005:39）：「ローマ帝国と密接に関係を持った商人、傭兵にとってはラテン文字を使用する方が利便性が図られるはずである。商人やエリートの退役兵ラテン文字を習得し、その知識を持ってルーン文字をわざわざ発案する必要性があったのか。もしあったとすればそれは何か」。

4 清水（2012:19）：「神秘的な力（ルーンの原義：「秘密・ささやき」）が付与されたならば、前例のない字形をとるのが自然だろう」。

5 “Germanic spiritual culture was traditionally oral. The art of writing was a luxury which Germanic people hadseen Romans practise and which they no doubt envied and tried to imitate, with very limited success” (Odenstedt1990:173)

6 ３世紀頃から石碑などに刻まれている同じくヨーロッパ辺境のオガム文字（ケルト語圏）の由来についても、あまり多くのことはわかっていない。ブリテン島に侵入したローマの文字使用に刺激を受け考案されたと考えられている。６世紀くらいになるとキリスト教会が使用するラテン文字が普及しオガム文字は次第に使用されなくなった。なお、古代ケルト諸語の分類としては次のような分類が考えられる：東ケルト語として、ガリア語・ブリタニア語・ガラティア語・レポント語、そして、西ケルト語として、ケルト・イベリア語・タルテッソス語・ヒーベルニア語（原アイルランド語）。

7 Man, J. 2000 *ALPHA BETA*『人類最高の発明アルファベット』晶文社 11-12 頁。

8 Man, J. 2000 *ALPHA BETA*『人類最高の発明アルファベット』晶文社 21-22 頁。

9 ルーン文字は当初、祭祀のための独自の文字体系として発達した可能性はある。

10 清水（2012:19-20）：「ルーン文字の一つ一つは正確に音価と対応しており、実用性（日常的な通信）が念頭にあったことは疑いない」。

11 ここで述べた「最後の姿」とは、ルーン文字の完全な消滅を意味するものではない。あくまでも日常的な実用上でのことである。所有の表示（洗礼盤・鐘など）としてルーン文字の署名が残されることがあり、ノルウェーの農民の間では今日でも所有のしるしにルーン文字が使われることがあるという。

12 泉井久之助『ゲルマーニア』岩波文庫 (S.63-64)

13 『世界の文字の図典 普及版』（吉川弘文館）160 頁：「２～３世紀にラテン文字の字形に現われた書体。荘重な書体で、筆記具・紙質（パピルスから羊皮紙へ）の変化に伴う書写の際の角度の変化のためと考えられる。それまでの書体が概して横線が太く縦線が細かったのに対し、線の太さがほぼ逆になり全体に円み

を帯びている」。

14 北欧では、青銅の冶金術が紀元前 1500 年頃、鉄の使用が紀元前 500 年頃、始まったとされている。

15 谷口（1971:3-5, 59-64）

16 シュミット（2004:89）。それにも拘わらず、ルーン文字によるテキストは依然としてなお古語を含んでいて、より古い共通ゲルマン語 Gemeingermanisch の状態を照らし出すのではないかと考えることができる。

17 谷口（1987:239-240）

18 最古級の銘文は必ずしもスカンジナビア諸語の特徴に限っているとは言えない。

19 Antosen は北ゲルマン語・西ゲルマン語の区別がほとんどない時期を北西ゲルマン語と名付けている。

20 ガレフースの黄金の角笛 Goldghorn von Gallehus（紀元後 400 年頃）の中、EKHLEWAGASTIZ: HOLTIJAZ: HORNA: TAWIDO̲「我，ホルティング（Holt の息子）であるフレワガスト Hlewagast がこの角笛を作れり」というふうに –o の綴りも見られる。

21 沼地は、特殊な酸があり、また気体や液体の流通がないため、驚くほど保存状態のよい出土品が残っている。

22 Meldorf の留め金は、出土地のものであり、遠くの土地からもたらされたものではない。

23 清水（2012:54）では「ラテン文字に似たルーン文字」とされている。

24 Moltke (1976) の考えによれば、紀元前後 ± 100 年に、ラインラント（ライン川以西の地方）からデンマークへもたらされたラテン文字を基にルーン文字が案出されたとみなされている。

25 Klaus Düwel (1981), ‘The Meldorf Fibula and the Origin of Runic Writing’, *Michigan Germanic Studies*, 7.

26 Looijenga (1997:324) : The inscription on the Meldorf brooch (dated ca. 50 AD) can be read as *hiwi*, which, according to Düwel (1981:12) is a “fairly well-known etymon, occurs, for instance, in Gothic heiwa-frauja‘landlord, master of the house’. ”

27 ２番目の文字の形に基づく判断・意味解釈は確かに難しい（iþih あるいは iwih とも読める）。

28 Düwel, K.（1981）: ‘Runes, Weapons, and Jewelry: A Survey of Some of the Oldest

Runic Inscriptions', *Mankind Quarterly* 21, S. 71-73. あるいは Düwel, K. & Gebühr, M.（1981）: „Die Fibel von Meldorf und die Anfänge der Runenschrift", *ZdA* 110, S.152-175.

29 曜日の名称はローマからゲルマニアにもたらされた典型例である（英語の曜日の語源は天体に由来するものと神話に由来するものに分かれる）。月曜日（Monday）：月（moon）の日、火曜日（Tuesday）：北欧神話の軍神 Tiw、水曜日（Wednesday）：北欧神話の主神 Woden、木曜日（Thursday）：北欧神話の雷神 Thor、金曜日（Friday）：北欧神話の女神 Freija、土曜日（Saturday）：土星（Saturn）の日、日曜日（Sunday）：太陽（Sun）の日。

30 谷口（1971:22）

31 清水（2012:18-20）：「ゲルマン人は沼を神聖化し遺品を葬る習慣があり、古いルーン文字資料（木材など）が泥炭地層からなる沼沢地で見つかる」。確かに、考古学的にもデンマークは泥沼が多く、ここから出土するものはほとんど外形が損なわれていない。

32 ウォルシュ M. O'C. 薮下 紘一 訳（1990:19）「北欧語入門」北海道大学図書：「後に 8 世紀頃、音変化が起きて 16 文字に縮小したルーン文字（新フサルク）は主に日常生活で使われた」。

33 ウォルシュ M. O'C. 薮下 紘一 訳（1990:18）「北欧語入門」北海道大学図書。

34 確かに、ルーン文字は、ギリシア文字、あるいは、北イタリア（エトルリア）文字を基にして生み出されたという説、もしくは、初期のルーン遺物が多く発見されている東ヨーロッパで生まれたとする考え方、など定説が確立するには至っていない。Düwel, K. も "Nur die Latein-These findet nach wie vor starkeBeachtung." と述べている。

35 Düwel, K. も „Nur die Latein-These findet nach wie vor starke Beachtung." と述べている。

36 Vennemann (2012:532): „ [⋯] scheint die lateinische These neuerdings an Boden zu gewinnen. Was insofernverständlich ist, als Skandinavien, wo die ältesten Runeninschriften gefunden wurden, sich zur Entstehungszeitdieser Inschriften zumindest am Rande des großen römischen Kulturraums befand."

37

38 E. H. Antonsen はこの点に問題を投げかけている。すなわち、ルーン文字の基本形とされているものはあくまで後世の研究者による再建形であるので、基本形が確立していない上でラテン語の大文字と対比するという作業の妥当性に対してである。

39 E. Moltke も Wimmer の考え方を支持している（紀元前後 100（50）年にライン川以西のラインラント地方からラテン文字がデンマークにもたらされ、その地でルーン文字が生み出されたとしている）。まずローマ人とゲルマン人の間を仲介したのは北部イタリアのケルト人であると主張されている（Wimmer）。その他、Pedersen（1923）, Agrell（1938, ラテン文字の斜字体に注目）, Askeberg（1944, ゴート人がまだヴァイクセル河口付近にいた１世紀にルーン文字を創造したという考え）等の学者が賛同しており、修正・手直しが加えながら今日まで絶えることなく支持が継承されている。

40 岡崎（1995:5）

41 ルーン文字は徐々に発達したものではなく（４世紀の西ゴートでゴート・アルファベットを創り出したウルフィラのような）ある特定の人物によって作り上げられたとする見解がある。

42 谷口（1971:60-61）:「ローマ文明の影響が今や（紀元後１～５世紀）ローマ人との密接な接触、交易、戦争などにより色濃くゲルマンを蔽うことになる。ゲルマン人の文化はその影響により著しい進展を見た。ルーン文字の発明もこのゲルマン文化の一大飛躍の中において理解されねばならない。北欧の墳墓にローマの貨幣、銀器、銅器、装飾品、ガラス器などのおびただしい出土を見ることになる」。

43 谷口（1971:125）:「1700 年頃のルーネ［…］は、fuþark の順序も失われ無残なほどラテン文字の攻撃にさらされ、昔日の fuþark の面影はない」とし、文字体系として「ラテン文字がすっかりルーン文字と同居した感がする」と述べている。クリスタル（1992:288）も参照のこと。

44 Düwel, K. ([3]2001): *Runenkunde*, Metzler.

45 小塩（2008:17）

46 http://www.runsten.info/runes/german/origin.html（2015 年 2 月アクセス）

47 http://www.runsten.info/runes/german/origin.html（2015 年 2 月アクセス）：E.Moltke もこの説を支持している。Moltke はルーン文字のフサルクの並び方は重要でないと退けている。ルーン文字は左から右また右から左というように牛耕式という交互の方向に書かれるものであるが、この点も問題視していない（ラテン文字は一貫して左から右に書かれる）。一方、Meyer, R.M.（1896:165-174）は、Wimmer がモデルとして挙げるラテン文字からは 11 のルーン文字が説明しづらいと言明している。

48 „Drei Haupttheorien gab es bisher, nämlich die Herkunft vom lateinischen oder vom griechischenAlphabet oder eine Übernahme aus dem Etruskischen. Und jede davon hat ihre überzeugten Anhänger. Für mich zeigt das schon, dass da was nicht stimmt. Denn es ist unmöglich, dass jede dieser Theorienrichtig ist. Wohl aber können alle drei falsch sein.“ (Vennemann 2013-9-14 Samstagsgeschichte)

49 Looijenga（2003:2）は、北イタリア（エトルリア）文字説を支持する立場であるが、‘It seems logical to look for the origins of runic script not in Scandinavia, but nearer the Roman *limes*.’ と述べ、ルーン文字誕生の地をローマ帝国との国境沿いとみなしている。この考え方の背景には ‘I chose not to focus on Scandinavia, as is more usual when studying the early runic traditions.’ という方針がある。

50 Bugge（1905-1913）, v.Friesen（1906）, Kabell（1967）らが支持している。

51 http://www.runsten.info/runes/german/origin.html（2015 年 2 月アクセス）を参照のこと。

52 ギリシア言語文化圏で、非常に古いルーン文字彫刻物が発見されている。

53 当時、ローマ帝国の公用語はギリシア語・ラテン語であった。

54 ハルベリ・岡崎（1990:15）『北欧の文学（古代・中世編）』（鷹書房）

55 ケルト文字・ラテン文字に影響を受けたヴェネト文字（エトルリア文字の１変種）に特に注目している。

56 Krause (2000:36) : „Nachdem bereits K.Weinhold in seinem klassischen Buch „Altnordisches Leben“ (1856) an die Herkunft der Runen aus einem etruskischen Alphabet, wenn auch ohne jede nähere Begründung, gadacht hatte, versuchte der norwegische Sprachwissenschaftler und Keltologe Carl J. Marstrander (1928) den Nachweis zu füh-

ren, daß die Runen von einem nordetruskischen Alphabet abstammten, das seinerseits aus einem altgriechischen Alphabet entwickelt war. Die verschiedenen Gruppen dieser nordetruskischen Alphabete finden sich in Inschriften aus dem südwestlichen, südlichen und östlichen Alpenvorland aus der Zeit etwa vom 5. Jh. v. Chr. bis in den Anfang des 1. Jh.s n. Chr. Völker verschiedener Sprachen bedienten sich dieses Alphabetes: Kelten, Etrusker und Germanen.“

57「１世紀頃に、ギリシャ文字やラテン文字、北イタリア文字などを参考に、ゲルマン語の発音体系に合うよう改変して成立したものと推測されている。ルーン文字の起源説としては、学者の間では北イタリア説が最も有力である。」また、Looijenga（2003:81）は、ローマ帝国との国境であるライン河沿いでローマ帝国の文明とゲルマン人が接触し、ゲルマン人が北イタリアのアルファベットをゲルマン語に適したふうに発展させたとしている（原 2005:38）。

58 音韻上顕著な点は b, d, g に当たる文字をもたないことである。

59 Altheim & Trautmann（1939）や Markey（1998）にも支持されている。

60 ラテン文字と混交しながらかなり長い間，生き延びた文字である。

61 ウンターシュタイアーマルク Unterschteiermark, 今日のスロヴェニアの Negau で発見された。

62 Krüger（1978）:「この文字はゴート語と異なっているため、狭い意味での共通ゲルマン語とは見なされない」が、「すべての北ゲルマン語および西ゲルマン語の方言が自然のまま残った祖語形 natürliche Ursprache であるとみなすことができる」（von Penzl 1989a:87&93）。

63「軍勢の客」ともとれる。Wotan「ヴォータン」のことと考える見解もある（シュミット 2004:89）。

64 teiwa はゲルマンの軍神 *teiwaz「テュール神」の与格。

65 別のゲルマン種族キムベルン人 Kimbern（ユトランド出身）を挙げる Arntz（^{2}1944）など種々の見解がある。

66『言語学大辞典』別巻「世界文字辞典」S.1137

67 谷口（1971:27-30）

参考文献

シャルル・イグーネ／矢島文夫訳（1956）:『文字』クセジュ文庫ルーン銘文
クリストファー･ウォーカー／大城光正訳（1995）:『楔形文字』學藝書林（大英博物館双書）
岡崎 晋（1999）:「ルーン文字とそのメッセージ――スウェーデン､その他の北欧諸国のルーン文字銘文から――」『学習院大学言語共同研究所紀要』第 23 号、S. 3-14.
小野寺幸也（1982）:『文字の歴史――中近東における起源と発達――』中近東文化センター
ガウアー A. ／矢島文夫訳（1987）:『文字の歴史――起源から現在まで――』原書房
加藤一朗（1962）:『象形文字入門』中公新書
ルイジャン・カルヴェ／矢島文夫監訳・会津洋・前島和也訳（1998）:『文字の世界史』河出書房新社
E. キエフ／板倉勝正訳（1958）:『粘土に書かれた歴史――メソポタミア文明の話――』岩波新書
C.H. ゴードン／津村俊夫訳（1979）:『古代文字の謎――オリエント諸語の解説――』現代教養文庫
原 真由美（2005）:『ルーンの系譜』（http://www.runsten.info）
藤代泰三（1989）:『キリスト教史』嵯峨野書院
栗田伸子・佐藤育子（2009）:『通商国家カルタゴ』講談社
『言語学大辞典』別巻「世界文字辞典」（2001）三省堂
ジョルジュ・ジャン／矢島文夫訳 (1990) :『文字の歴史』創元社
世界の文字研究会（2009）:『世界の文字の図典』吉川弘文館
杉 勇（1968）:『楔形文字入門』中公新書
谷口幸男（1971）:『ルーン文字研究序説』広島大学文学部紀要（特別号１）
谷口幸男（1978）:『ゲルマンの民俗』渓水社
ジョン・チャドウック／細川敦子訳（1956）:『線文字Ｂ――古代地中海の諸文字――』學藝書林（大英博物館双書）
ドーブルホーファー E. ／矢島文夫・佐藤牧夫訳（1963）:『失われた文字の解読Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」山本書店
西田龍雄（1981）:『世界の文字』講座言語第五巻、大修館書店
日本聖書協会（1999）:『バイブルアトラス』
ハーレイ H.H.（20033）『聖書ハンドブック』聖書図書刊行会
カーロイ・フェルデシ=パップ／矢島文夫他訳（1988）:『文字の起源』岩波書店

加藤 隆（1999）:『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』大修館書店
ジョン･ヒーリー／竹内茂夫訳（1995）:『初期アルファベット』學藝書林 (大英博物館双書)
モーリス／唐須教光訳（1982）:『古代文字解読の物語』新潮社
モーリス W.M.P. ／唐須教光訳（1995）:『古代文字の話――エジプト象形文字から線文字 B まで――』講談社学術文庫
ムーアハウス A.C. ／ねずまさし訳 (1956) :『文字の歴史』岩波新書
清水 誠（2012）:『ゲルマン語入門』三省堂
ステファヌ・ロッシーニ／矢島文夫訳（1988）:『古代エジプト文字入門』河出 書房新社
谷川政美（2001）:『フェニキア文字の碑文』国際語学社
矢島文夫（1977）:『文字学のたのしみ』大修館書店
矢島文夫（1999）:『解読 古代文字』ちくま学芸文庫

Anderson, C. E. (2005) “The Runic System as a Reinterpretation of Classical Influences and as an Expression of Scandinavian Cultural Affiliation.” http://www.carlaz.com / phd/AndersonCE_1999_Runes_and_Reinterpretation.pdf
Antonsen, E. H. (2002) *Runes and Germanic Linguistics*. Berlin : Mouton de Gruyter.
Arntz, H. (1938) *Die Runenschrift*. Tübingen : Max Niemeyer.
Arntz, H. (2009=^{2}1944) *Handbuch der Runenkunde*. Tübingen : Max Niemeyer.
Bammesberger, Alfred & Waxenberger, Gaby (2006) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. Akten der Tagung in Eichstätt vom 20. bis 24. Juli 2003. Berlin : Walter de Gruyter.
Bang, Jørgen. Ch. (1997) “Runes: Genealogy and grammatology.” An augmented version of the original Danish essay *Runernes genealogi og grammatologi* which was presented at Aarhus University 10 Oktober 1996. Odense: Odense University, Institute of Language and Communication.
Barnes, Michael P. (2012) *Runes. A Handbook*. Woodbridge : The Boydell Press.
Blättler, Jana (2007) *Kleinsprachen und Sprachstandardisierung*. Champfèr : Eigenverlag.
Braunmüller, Kurt（1998）„Methodische Probleme in der Runologie – einige Überlegungen aus linguistischer Sicht.“ In: Düwel, K. & Nowak, S. (Hrsg.) *Runeninschriften als Quellen interdisziplinärer Forschung*. Berlin : Walter de Gruyter.
Bundi, Martin (1982) *Zur Besiedlungs- und Wirtschaftsgeschichte Graubündens im Mittelalter*. Chur : Claven-Verlag.

Camathias, Flurin (1907) „Nossa viarva.“ In: *Annalas retorumantschas*. vol. 21, S.127-8.

Cathomas, Bernhard (2012) „Sprachen fallen nicht vom Himmel. Zur Sprachplanung in der Rätoromania,“ In: Wanner Gerhard & Jäger Georg (Hg.): *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur : Desertina, S. 125-50.

Clavadetscher, Otto, Paul (1994) *Rätien im Mittelalter*. Disentis/Sigmaringen : Desertina.

Collenberg, Adolf & Gross, Manfred (2003) *Istorgia Grischuna*. Cuira/Chur : Lia Rumantscha.

Cunliffe, Barry & Koch, John (2010) *Celtic from the West*. Oxford : Oxbow Books.

Darms, Georges (1989) „Sprachnormierung und Standardsprache.“ In: Holtus, G., Metzelin, M., & Schmitt, Ch. (Hg.) : *Lexikon der romanistischen Linguistik*, Vol. III, Tübingen:Max Niemeyer, S.827-853.

Dazzi, Anna-Alice (2012) „Verschiedene Aktivitäten der Lia Rumantsch zur Erhaltung und Förderung des Romanischen.“ In: Wanner Gerhard & Jäger Georg (Hg.) : *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur : Desertina, S. 117-24.

Decurtins, Alexi (2001) *Niev vocabulari romontsch: Sursilvan-Tudestg*. Chur : Legat Anton condrau.

Deplazes, Gion (1987) *Funtaunas. Istorgia da la litteratura rumantscha per scola e pievel. Tom 1: Dals origins a la refurma*. Cuira/Chur: Lia Rumantscha.

dtv-Atlas Deutsche Sprache (2007) München: dtv.

Düwel, Klaus ([3]2001) Runenkunde. Stuttgart : Metzler.

Eichner, Heiner (2006) „Zu den Quellen und Übertragungswegen der germanischen Runenschrift – Ein Diskussionsbeitrag.“ In: Bammesberger, A. & Waxenberger, G. (Hrsg.) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. Berlin : Walter de Gruyter.

Feist, Sigmund (1902) „Eine neue Theorie über die Herkunft der deutschen Runendenkmaler.“ In *Zeitschrift für deutschen Unterricht*. 26. S.246-249.

Friedrich, Johannes & Röllig, Wolfgang ([3]1999) *Phönizisch-punische Grammatik*. Rome : Editrice Pontificio Instituto Biblico.

Furer, Jean-Jacques (1999) „Graubünden, von der Dreisprachigkeit zur deutschen Einsprachigkeit. Eine traurige Ausnahme in der Schweizer Praxis“ In: Dieter Katten-

busch (Hg.): *Studis Romontschs. Beiträge des Rätoromanischen Kolloquiums (Giessen/ Rauischholzhausen, 21.-24. März 1996)*. Wilhelmsfeld : Gottfried Egert.

Furer, Jacques (2005) *Volkszählung 2000. Die lage des Romanischen*. Bern : Bundesamt für Statistik.

Gross, Manfred (2004) *Romanisch. Facts & Figures*. Chur : Lia Rumantscha.

Haarmann, Harald ([2]1991) *Universalgeschichte der Schrift*. Frankfurt : Campus.

Hammarström, Magnus (1929) “Om runskriftens härkomst.” In *Studier I nordisk filologi*. 20. S.1-67.

Hansen, Ulla Lund (1995) *Die Runen der römischen Kaiserzeit Himlingøje - Seeland - Europa Nordiske Fortidsminder Serie B 13*. København : Det Kongelige Nordiske Oldskriftselskab.

Heizmann (2010) „Zur Entstehung der Runenschrift,“ In: J.O.Askedal et al. (Hrsg.), *Zentrale Probleme bei der Erforschung der älteren Runen, S.9-32*. Frankfurt : Peter Lang.

Henriksen, Mogens Bo (1996) *Harja-kammen fra Vimose-fundet Fynske Minder*. Odense : Odense Bys Museer.

Høst, Gerd (1976) *Runer. Våre eldste norske runeinnskriftere*. Oslo: Aschehoug,

Jensen, Hans (1925) *Geschichte der Schrift*. Hannover : Orient-Buchhandlung Heinz Lafaire.

Jensen, Hans (1969) *Die Schrift in Vergangenheit und Gegenwart*. Berlin : VEB Deutscher Verlag.

Jansson, Sven B. F.([3]1984) Runinskrifter i Sverige. Stockholm : AWE/Gebers.

Kraas, Frauke (1992) *Die Rätoromanen Graubündens. Peripherisierung einer Minorität*. Stuttgart : Franz Steiner Verlag.

Krause, Wolfgang (1970) *Runen*. Berlin (Sammlung Göschen).

Larsson, Patrick (2005) „Runes.“ In: McTurk, Rory (Hg.): *A Companion to Old Norse-Icelandic Literature and Culture*. Malden, Mass.: Blackwell Publishing, S. 403-426.

Liver, Ricarda (2009) „Deutsche Einflüsse im Bündnerromansichen.“ In: Michael Elmentaler (Hg.) *Deutsch und seine Nachbarn*, S.133-148.

Looijenga, Jantina Tineke Helena (1997) Runes around the North Sea and on the Continent AD 150-700 : Texts & Contexts. Groningen (Dissertation Universität Groningen).

Maraschio, Nicoletta & Robustelli, Cecilia (2011) “Minoranze linguistiche: la stuazione in Italia.” In: Stickel Gerhard (Hg.): *National, Regional and Minority Languages in Europe*. Frankfurt am Main : Peter Lang, S. 73-80.

Mayr, Ulrike (2012) „Von der Spätantike zum Mittelalter. Romanen und Alamannen im Alpenrheintal – ein Konflikt der Kulturen?“ In: Wanner Gerhard & Jäger Georg (Hg.) : *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur : Desertina.

Meyer, R. M. (1896) „Runenstudien.“ In Paul u. Braunes *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. XXI. S.162-184.

Miller, D. Gary (1994) *Ancient scripts and phonological knowledge*. Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, Series IV: Current Issues in Linguistic Theory 116. Amsterdam : John Benjamins.

Moltke, Erik (1985) *Runes and Their Origin. Denmark and Elsewhere* Copenhagen : National Museum of Denmark, Nationalmuseets Forlag.

Morris, Richard L. (1988) *Runic and Mediterranean epigraphy*. Odense (North-Western European Language Evolution, Supplement 4).

Nedoma, Robert (2006) „Schrift und Sprache in den südgermanischen Runeninschriften.“ In: Bammesberger, A. & Waxenberger, G. (Hrsg.) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. Berlin : Walter de Gruyter.

Nowak, Sean (2003) *Schrift auf den Goldbrakteaten der Völkerwanderungszeit: Untersuchung zu den Formen der Schriftzeichen und zu formalen und inhaltlichen Aspekten der Inschriften*. Dissertation, Universität Göttingen.

Odenstedt, Bengt (1990) *On the Origin and early History of the Runic Script*. Uppsala: Almqvist & Wiksell International.

Page, Raymond I. (^{2}1999) *An introduction to English runes*. Woodbridge: Boydell Press.

Philippa, Marlies, & Aad Quak (1994) : *Runen. Een helder alfabet uit duistere tijden* Amsterdam : T. Rap.

Seebold, Elmar (2006) „Das *fuþark* auf den Brakteateninschriften.“ In: Bammesberger, A. & Waxenberger, G. (Hrsg.) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. Berlin : Walter de Gruyter.

Seim, Karin Fjellhammer (2007) „Runologie.“ In: Odd Einar Haugen (Hg.) : *Altnordische Philologie : Norwegen und Island*. Berlin (aus dem Norwegischen von Astrid van

Nahl), S.147-222.

Spurkland, Terje (2001) *I begynnelsen var fuþark. Norske runer og runeinnskrifter*. Oslo : Landslaget for norskundervisning, Cappelen akademisk forlag (= LNUs skriftserie; 138).

Stoklund, Marie (2006) „*Vimose. Runologisch*,“ *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*. S.410f./410-414. Berlin : Mouton de Gruyter.

Valär, Rico Franc (2012) „Wie dir Anerkennung des Rätoromanischen die Schweiz einte. Einige Hintergründe zur Volksabstimmung vom 20. Februar 1938.“ In: Wanner Gerhard & Jäger Georg (Hg.) : Geschichte und *Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur : Desertina, S. 101-16.

Vennemann, Theo (2012) *Germania Semitica*. Berlin : Mouton de Gruyter.

Otto von Friesen (1906) *Om runskriftens härkomst*. Uppsala : Uppsala universitetets årsskrft.

Wanner, Gerhard (2012) „Räter und Rätoromanen in der Geschichtsschreibung Vorarlbergs,“ In: Wanner Gerhard & Jäger Georg (Hg.) : *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur : Desertina, S. 69-100.